

〔平成 26 年度 博士学位論文要旨〕

近代西欧文明に対する日韓の思想的対応
—廣池千九郎と沈大允の道德思想を中心に—

言語教育研究科 比較文明文化専攻 博士後期課程 金 聖哲

(論文要旨)

本研究は近代西欧文明に対する日韓両国の思想的対応の事例を廣池千九郎（1866~1938年）と沈大允（シムデユン、1806~1872年）の道德思想を中心に考察したものである。

まず、先行研究(2章)では、近代西欧文明に対する日韓両国の思想的対応として、廣池千九郎と沈大允の道德思想を比較し、両者の思想に備わる現在の意味を考察しようとした研究を取り上げている。日本では廣池を、韓国では沈をその比較研究の対象としたものを取り上げ、その傾向や潮流を概観した。前者の場合は、廣池の道德思想の普遍性や科学性に注目した研究が見られ、また後者の場合は、沈の道德思想の世俗性や現実性を考察した研究が見られた。

また本研究と関連した先行理論として、「文明」と「道德」の意味をより明確に把握するため、「文化」と「倫理」も併せて考察している。そして、「文明」と「道德」とが、どのような相関関係にあるかを管見することを通して、本研究に関連する先行研究を整理してみた。

次に研究方法と内容に関しては(3章)、二つに大別できる比較文明論的な視点を設定している。一つは、西欧文明に対する日本文明と朝鮮文明という視点であり、もう一つは西欧文明に対する日本の廣池の道德思想と朝鮮の沈の道德思想という視点である。その上で16世紀以来、西欧文明の影響下にあった日本文明と朝鮮文明を比較し、これら三文明の影響関係と特質を考察する。次に、道德思想の視点から、近代西欧文明に対する日本の対応の一例として、廣池の確立した「最高道德」の思想について考察する。それと同時に、近代西欧文明に対する韓国の道德思想の対応の一例として、沈の「與人同利」の思想を取り上げる。

近代西欧文明に対する日本文明と朝鮮文明の対応では(4章)、まず19世紀以後に近代

西欧文明が非西欧文明圏において中心文明としての位置を獲得するようになる過程を、西洋のルネサンス、宗教改革、そして科学革命という一連の流れに焦点をあてて管見する。そして近代西欧文明から衝撃を受け、周辺文明へと押しやられた日本文明と朝鮮文明を取り上げ、西欧化に成功した日本と、それに失敗し植民地となった朝鮮が、近代西欧文明に如何に対応したのかを、それぞれの宗教、科学、思想の観点から明らかにしたい。その上で、近代西欧文明、日本文明、朝鮮文明の三文明の特質と問題点も合わせて比較考察する。

廣池千九郎における「最高道德」の思想では(5章)、廣池の生涯を通じての思想形成の過程を概観する。次にそれまでの道德理論を集大成したモラロジー思想の本質を明らかにするため、その学問的動機、意義、道德原理の概略と、モラロジーにおける道德思想の構造などを管見する。最後に最高道德の本質を明らかにするために、廣池の世界観の分析を通して浮かび上がる自然観、人間観、道德観、神観などに注目しながら、最高道德の構造と内容を考察する。

沈大允における「與人同利」の思想では(6章)、廣池の場合と同様に、まず沈の生涯を通じての思想形成の過程を概観する。次にそれまでの儒教の思想を集大成した福利の思想の本質を明らかにするため、その学問的動機、意義、道德原理の概略と、福利思想における道德思想の構造などを管見する。最後に與人同利の本質を明らかにするために、沈の世界観を分析し、その自然観、人間観、道德観、神観などにも注目しながら、與人同利の構造と内容を考察する。

以上、比較文明論的観点を用いた本研究により、つぎのようなことが言えるだろう。まず、19世紀以降に近代西欧文明が非西欧文明圏で中心文明としての位置を獲得するようになったのは、人間中心思想を基盤にした科学革命の結果であるということである。次に、近代西欧文明の衝撃に対して日本が適切に対応できたのは、西欧文明の精神的側面と物質的側面を峻別することで、外来文明を積極的に受容しながらも、日本文明を物質的に発展させることができたからである。しかしその一方で日本は、伝統的な精神価値を喪失し、帝国主義に便乗する道を選ぶことになった。最後に、近代西欧文明に対して朝鮮が対応に失敗したのは、西欧文明の宗教と科学を分離することができず、未分化のままで捉え、他文明である西洋列強とは自主的に交流できなかったからである。このような朝鮮の傾向は、道德的優越主義の基盤をつくり、外国勢力の侵略に対抗する原動力になったものの、現実的側面を軽視したため、他国の植民地という境遇への転落を余儀なくされたのである。

近代西欧文明に対する思想家個人の対応を見ると、日本の廣池は、近代文明の危機の原

因を人間中心的思想の勃興に求め、これに対する思想的対応として「モラロジー」という新しい科学思想を創設した。廣池は、「最高道德」を宇宙自然の範疇の中で捉え、神の心、すなわち宇宙自然の万物を生成化育する慈悲心を科学的に証明することで、道德の權威を立て直し、これまでの人間中心の文明の限界を乗り越え、人類が謙虚に相互扶助しながら永続的に共存共栄する道を唱導した。これに対し、朝鮮の沈大允は、文明の危機を人間の問題として捉え、その思想的対応として「福利」という独自の思想を提唱した。沈の「與人同利」の思想は、人間の実生活で発生しやすい争利を避け、相互の利益と幸福を図ろうとするものだが、その主眼も、これまで欧米で主流をなしてきた自己中心主義を再考することにある。

廣池と沈の自然観、人間観、道德観はそれぞれ異なり、前者は道德の科学的研究の道を開き、後者は儒教的道德を再考する道を開いた点に特徴があるが、近代西欧文明の挑戦に対し、ともに東アジアの伝統を踏まえ、それぞれに道德的応戦をしたことは注目に値する。